

報告事項 ウ

令和3年度英語教育実施状況調査結果及び今後の取組について

令和3年度英語教育実施状況調査結果及び今後の取組について、別紙のとおり報告します。

令和4年6月22日

鳥取県教育委員会教育長 足羽英樹

令和3年度英語教育実施状況調査の全国の結果が公表されましたので、本県の状況を報告します。
 ○中学校・高等学校ともに生徒の英語力は年々少しずつ向上しているが、国の目標値には届いていない。
 ○また、英語科の授業づくりの中心となる言語活動の実施状況についても全校種とも全国と比べて低い状況にあるため、言語活動の改善を中心として教師の指導力の向上を図り、生徒の英語力を高めていく。

(英語教育実施状況調査)

文部科学省によって平成25年度から行われている全国公立小中高等学校等における英語教育の状況についての調査 (R2 未実施)

1 概要

(1) 英語担当教師並びに生徒の英語力の状況

調査項目	R3達成度	全国順位	国の目標値	R1達成度	全国順位
R3英語担当教師の英語力の状況 (高等学校)	96.0%	2位	75%	92.7%	2位
R3英語担当教師の英語力の状況 (中学校)	33.5%	37位	50%	35.0%	27位
R3生徒の英語力の状況 (高等学校)	45.8%	27位	50%	42.7%	24位
R3生徒の英語力の状況 (中学校)	40.3%	36位	50%	38.8%	29位

※教師の英語力の状況：「英語能力に関する外部試験」の結果で、「CEFR B2レベル以上 (英検準1級など)」を取得している英語担当教師数の割合

※生徒の英語力の状況：「英語能力に関する外部試験」の結果で、中学校では「CEFR A1レベル以上 (英検3級など)」、高等学校では「CEFR A2以上 (英検準2級など)」を取得している又は相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合

(2) 英語教育推進の状況

調査項目	R3達成度 (順位)	全国平均	R1達成度	全国平均
「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標設定の状況 (高等学校)	100% (1位)	94.0%	100%	96.0%
「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標設定の状況 (中学校)	96.4% (32位)	94.7%	100%	92.3%
「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標設定の状況 (小学校)	65.3% (38位)	78.7%	—	—
授業における、言語活動時間の状況 (高等学校)	31.6% (45位)	50.3%	44.3%	37.7%
授業における、言語活動時間の状況 (中学校)	65.3% (34位)	71.3%	70.4%	79.0%
授業における、言語活動時間の状況 (小学校) 【注1】	75.4% (47位)	92.0%	—	—
小中連携の状況	58.9% (37位)	72.5%	87.5%	82.0%

※「CAN-DOリスト」：英語を使って何をすることができるようになるのか領域別 (話す、聞く等) に示した目標

「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標設定状況：「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標を設定している学校の割合

※授業における言語活動の状況：

(小) 授業において児童が英語で言語活動をしている時間が、半分以上と回答した学級の割合

(中・高) 授業において生徒が英語による言語活動をしている時間が、授業の半分以上と回答した教師数の割合

【注1】

※言語活動：現行の学習指導要領に例示されている英語を用いてコミュニケーションをする活動

(「話すこと」だけでなく「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の言語活動も含む。)

⇒小学校については、全国最下位の数値となっているが、言語活動についての学校への周知・理解が十分でなかったため、4技能(「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」)の中で「話すこと」の言語活動のみを言語活動として報告した学校があり、実際の授業における言語活動全体の実施状況を正確に反映する数値になっていない面もある。

2 課題と今後の取組

(1) 小学校の課題と今後の取組

- ・言語活動の実施状況が全国最下位の低い数値となっているが、4技能の中で「話すこと」の言語活動のみを言語活動の実施として報告した学校があり、実際に学校で実施している言語活動の数値を正確に反映していないことが考えられる。
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の設定状況の数値が低く、リストの設定と実際の活用方法についての認知が十分ではなかったと考えられる。
- ・外国語活動・外国語の授業を行う小学校英語専科教員等に対しては、授業づくりの指導や支援は行っているが、学級担任への指導や支援が十分ではなく、教科書を用いた言語活動の実施に課題がある。
 →言語活動の正確な理解と授業改善のための動画資料を作成・配布する。教育課程研究集会で、CAN-DOリストと言語活動を適切に実施した指導と評価の一体化を推進する。

(2) 中学校の課題と今後の取組

- ・生徒の英語力は年々向上しているが、国の目標値には届いておらず、全国の上昇率に対して低い状況である。
→英検 IBA 等を活用し、生徒が自分の英語力を客観的に認識し、生徒の主体的な学びを促す。
- ・教師の英語力が全国平均に比べて低い。
→英語資格・外部検定試験の特別受験制度等の活用を促進する。
- ・言語活動についての理解が不十分なため、学習指導要領の趣旨に沿った言語活動を実施できていない。
- ・英語技能面では、即興的に「話すこと（自分の気持ちや考えを表現する力）」や、「読むこと（英文を読んで概要や要点を捉える読解力）」に課題がある。
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の設定状況の数値は高いが、公表・共有や活用状況の数値が低く、各学校で設定した CAN-DO リストを授業づくりに生かし切れていない状況がある。
→授業改善のための動画資料を活用して、「話すこと」や「読むこと」の力を伸ばす言語活動の改善について周知し、英語訪問等で英語科教員に直接指導助言する。定期考査研修会（中学校・英語）や教育課程研究集会で、CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化について周知する。

(3) 高等学校の課題と今後の取組

- ・生徒の英語力は、年々向上しているが、国の定める目標には届いていない状況である。
→教師の英語使用率を高めることで「聞くこと」の力を高め、「話すこと」の指導も充実させる。
- ・言語活動についての理解が不十分なため、学習指導要領の趣旨に沿った言語活動を実施できていない状況や、文法等の整理や練習のような活動が授業内で多くの時間を占めている状況がある。特に、専門学科や総合学科では言語活動の実施率が非常に低い状況である。
→教育課程研究集会で、生徒に身につけさせる資質・能力及び言語活動について周知するとともに、言語活動の指導の在り方等について研修会等を開催し、授業における言語活動の実践を推進する。また、一部の研修会において、専門学科及び総合学科の担当教員が課題について共有し、指導の改善に向けて協議する機会を持つ。

(4) 学校間連携における課題と今後の取組

- ・小中連携の状況が、全国の下降率と比較しても、令和元年度より大きく下がっている。新型コロナウイルス感染症の影響で、学校間で従来行っていた授業参観や研究会等での情報交換等を行うことができず、その代替となる小中連携のための取組も実施できなかった。
→授業参観や参集での情報交換だけでなく、オンラインでの教科部会の開催や中学校区内での CAN-DO リストや年間指導計画の共有等、コロナ禍でも持続可能で効果が期待できる小中連携の在り方について教育課程研究集会等で周知し、改善を図る。
- ・中高連携の状況は改善しているが、その成果が生かされ、指導の改善や生徒の英語力向上に十分に結びついていない現状がある。
→生徒が自己有用感を育みながらバランスのとれた英語力を高めるための系統的な英語教育の実現を目指し、さらに推進する。授業参観や参集での情報交換だけでなく、出前授業や生徒同士の交流など、多様な交流の在り方について、教育課程研究集会等を通じて、情報共有を図る。
- ・小・中・高等学校を通して一貫した方向性を基に英語教育をより一層推進していく必要がある。
→「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」研修協力校では、授業で実際に行う言語活動を軸として、各校種で作成した CAN-DO リストを全体で共有し、共通実践を図る等の連携を行っている。研修協力校での取組を、英語教育推進フォーラムで好事例として実践発表を行い、県内の学校へ情報提供する。